

法務省人権擁護局長賞
(石川県人権擁護委員連合会長賞)

「心の壁は作らない」

小松市立丸内中学校 3年

小 山 瑞 季 (こやま みずき)

私の家の近所には、たくさんの外国人が住んでいます。その多くがブラジル人で、夜になると集団でバスに乗り、どこかに働きに出かけていきます。そして翌日の十時ごろ、またバスに乗って一斉に帰ってきます。顔の作りや肌の色の違う人たちが何台ものバスに乗り、集団で移動する様子を初めて見たとき、私は、とても違和感がありました。けれど、自分の考え方を少し変えることで、知らなかったり隠れていたりした一面が見えてくることがあります。

三年前、私が小学校六年生だった頃のことです。私の小学校では、毎朝、近所の子どもたちが集まって集団登校をしていました。十二人の集団グループの内八人がブラジル人という中で、私は班長をしていました。ほとんどの子が日本語も話せるので、そんなに会話に困ることはありませんでした。でも、私は、集団登校に行くのがいやでした。一年生のA君はとても人懐っこい子でよく私の後をついてきました。登校のときはもちろん私にくっついてき、教室だけでなく、朝早くに自宅にまで私を呼びにきました。またB君は、いつも私の手をなめていきました。こういう行動に対して私は迷惑に思っていたのです。でも、そのことをどう伝えていいのかわからなかったし、どうせ分かりっこないという思いから、そのことを伝えようとはしていませんでした。

私の家は学校のすぐそばで、家から学校が見えます。集団登校の集合場所に行くより直接学校に行った方が近いくらいでした。それなのに、どうして私はこんな思いをしてまで集団登校の班長をしなくてはいけないのかと思いました。今になって思えば、生活習慣や価値観の違いからくる行動の違いだったのですが、当時の私には、集団登校が苦痛でしかありませんでした。

そんなある日のことです。夕食の後で祖母が手作りのフルーツケーキを出してくれました。初めて食べる味でしたがおいしかったです。祖母の話では、これはあるブラジル人の女性が持ってきたものだということでした。そういえば、私はあることを思い出しました。

一週間くらい前、祖母は玄関先で外国の女性と話をしていました。二人はとても仲がよさそうに見えましたが、私は何となく近寄りがたく、あいさつもせず、その場から離れま

した。その前日、日本にきて間もない彼女は、風邪をひいた子どものために病院をさがして、祖母が教えたというのです。知り合いがほとんどいなくて不安だという彼女に祖母は、よかったらこの後も尋ねてきていいよと伝えたので、再び尋ねてきていたのです。その後も彼女は祖母を尋ねて何度か家に来ました。彼女はたどたどしい日本語でしたが、それでもしっかり聞き取れるきちんとした話し方で、家族のことや仕事のことなどいろいろ話していきました。そうやって何度目かの時に、フルーツケーキを持ってきてくれたのです。「仕事を求めて日本に来たけれど、ブラジル人だからといってなかなか仕事が見つからない」とか「車の免許を持っていれば生活が楽になるのだが、車を維持するのも大変だ」という話を聞きました。それを聞いて、私は外国の人が日本で生活することの大変さを初めて知りました。怒りと疑問がわきました。どうして外国人だからといって人を差別するのだろう。

私ははっとしました。「私も、そうやん」私も集団登校で、相手がブラジル人だからといってえらそうな態度をとっていた…。これまでの自分が恥ずかしくなってきました。祖母はあの女性に対して日本人と全く変わらない態度で接していました。私から見ても彼女は、姿こそ日本人とは少し違うけれど、本当にきちんとした態度のすてきなお母さんでした。あとでわかったことですが、彼女は私の集団班にいる二年生の子のお母さんでした。

このことで、私の中に小さな変化がありました。集団登校では、自分の心にあった壁を壊して、少しずつ班の子達と自分からしゃべるようになりました。そして次第に集団登校で学校に行くのも抵抗がなくなってきました。相手が外国人だからといって勝手に変な壁を作って、相手のことを決めつけていた私。話してみるといろいろなことを知ることができたのに…相手をみかけだけで勝手に判断していた自分を反省しました。どんな人に対しても、見かけだけで勝手に判断して自分の中に壁を作ってしまうないようにしようと思いました。

春、私の学校に外国籍の生徒が入学してきました。入学式でその子の名前が呼ばれた時、まわりがざわつくのを感じました。でも、小学校の時からそういう子に接してきた私は、「そなん、この子自身の名前や。おかしくなんてない」と思えました。そして、自分がそう思えていることがうれしくもありました。